

常設企画展

近代名古屋の日本画界

明治末から昭和戦前期にかけての名古屋および周辺地域の日本画の歴史を辿りながら、名古屋市美術館で初紹介の画家を含む中京画壇の作家たちの作品を一堂に紹介します。当時の名古屋は、江戸時代の伝統を引き継いだ画家や、東京・京都で新しい日本画を学んだ画家、画業以外の幅広い活動に取り組んだ画家など、多様な才能に彩られていました。作品だけでなく、中京画壇に関する貴重な資料もあわせて紹介します。知られざる中京画壇の世界をぜひご堪能ください。

編集・発行

名古屋市美術館

第一章 名古屋開府三百年と中京画壇の成立

本章では、明治43年（1910）に開催された「名古屋開府三百年記念新古美術展覧会」（新古美術展）の目録に名前が見える日本画家を中心に紹介します。紹介する画家の多くは同好社（同好画会）と後継団体である東海美術協会に所属していました。



小寺雲洞（1871～1930）

四条派に学んだ画家で、新古美術展では監査員、東海美術協会で常務理事と審査員を長年務めました。本図のような温和な画風の画家として知られています。



織田杏齋（1845～1912）

南北合派の画家で、新古美術展では雲洞と同じく監査員を務めました。本図のように桐の木陰で読書をする様子を描く主題は、中国の明・清時代の文人画によく見られるものです。

織田杏齋《桐隠読書図》
明治35年（1902）
絹本墨画淡彩・軸装
蟬庵コレクション

小寺雲洞《雨中渡船図》
大正～昭和（1910～20年代）
絹本着彩・軸装
蟬庵コレクション

【凡例】

・本パンフレットは、令和7年9月27日（土）から12月7日（日）までを会期として開催する常設企画展「近代名古屋の日本画界」のために制作したものである。出品作品のうち名古屋市美術館所蔵作品、および参考文献については、同じく本展に際して制作したリーフレット「中京画壇の日本画家たち―名古屋市美術館のコレクションより」で紹介している。

・常設企画展「近代名古屋の日本画界」の企画、本リーフレットの展示解説および作家・作品解説の執筆・編集は、名古屋市美術館学芸員・近藤将人が担当し、同館学芸課長補佐・松井美保、同館会計年度任用学芸員・福岡優里、山田真央香がこれを補佐した。

リーフレット「中京画壇の日本画家たち―名古屋市美術館のコレクションより」はこちらの二次元バーコードから電子版を閲覧できます（予告なく掲載を終了することがあります）。



田部井竹香 著
野崎華年 装丁
『古今中京画談』
明治44年（1911）
個人蔵

新古美術展の翌年に刊行された、中京地域の江戸時代以降の美術の変遷を流派ごとに紹介した書籍。300年におよぶ中京地域の日本画家・洋画家が網羅的に記されています。



渡辺秋溪（秋谿）（1866～1940）
京都で久保田米僊に学び、京都府画学校の教師も務めた画家です。後に帰名し、米僊が名古屋で開いた仙洞画塾の運営を引き継ぎました。風景を得意とし、特に富士山の絵を多く描きました。

渡辺秋溪（秋谿）
《富岳憧憬之一白糸瀑布図》
明治44年（1911）
絹本墨画淡彩・軸装
鯉庵コレクション



藤島華僊（1866～1929）
現在の群馬県出身で、京都に出て久保田米僊に学び、後に名古屋に移住し仙洞画塾の運営を補佐しました。風景画を得意とした渡辺秋溪（秋谿）とは対照的に人物画、特に観音・羅漢を得意としました。

藤島華僊《羅漢図》
大正7年（1918）
絹本着彩・軸装
鯉庵コレクション

用語解説コーナー①

・第十回関西府県連合共進会

明治43年（1910）3月16日～6月13日に鶴舞公園で開催された博覧会。関西だけでなく北海道・東北・九州を除く全国からの出品物を展示。来場者は約26万人で、当時の名古屋市の人口の6倍以上。

・名古屋開府名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会

第十回関西府県連合共進会に併せて愛知県商品陳列館で開催された展覧会。全ジャンルの美術品が集まった。

・東海美術協会

明治43年（1910）に発足した民間初の総合美術団体。明治16年（1883）に設立された日本画団体・同好社（同好画会）が前身の一つ。結成翌年から毎年展覧会を開催しただけでなく、古美術の展覧会や講演会なども定期的に行った、中京美術界の中核的団体。



大矢米年《吳道玄筆画龍上天図》
大正13年（1924）
絹本着彩・軸装（双幅）
鯉庵コレクション

大矢米年（1879～1966）
現在の名古屋市中村区出身で、京都に出て森川曾文、久保田米僊に師事した後に帰名しました。本作では、中国唐代の画家・吳道玄が龍に相対してその姿を描き出す様子を、迫力のある筆致で描き出しています。



毛利梅友《玉野霜曉》
大正～昭和（1920-30c.）
絹本着彩・軸装
個人蔵

毛利梅友（1871～1953）
尾張藩士の子。初め叔父である水谷棲谷に絵を学び、後に田能村直入の門に入りました。本作では晩秋の玉野の風景を、師である直入の影響色濃い画風で描き出しています。



兼松蘆門（1864～1917）
鷺見春岳に四条派、中野水竹、神保木石に南画を学び、菅原白龍にも学んだ画家で、美術研究者として『日本画沿革史』などの書籍も執筆しました。大正3年（1914）には、菩提寺の修繕費捻出のために200幅の山水画を描いており、その中には本作に画題・構図が酷似した作品も多数含まれています。

兼松蘆門《梅林之図》
明治44年（1911）
絹本墨画淡彩・軸装
鯉庵コレクション



狩野梅斎（1883～1969）
石河有鄰に師事し南北合法を学んだ後、上京して池上秀畝に師事しました。花鳥画、特に鶴を得意としました。本作に描かれるのは鶏ですが、花鳥を得意とした梅斎の典型的な作風を伺うことができます。

狩野梅斎《梅花双鶏図》
大正～昭和（1920-30c.）
絹本着彩・軸装
鯉庵コレクション

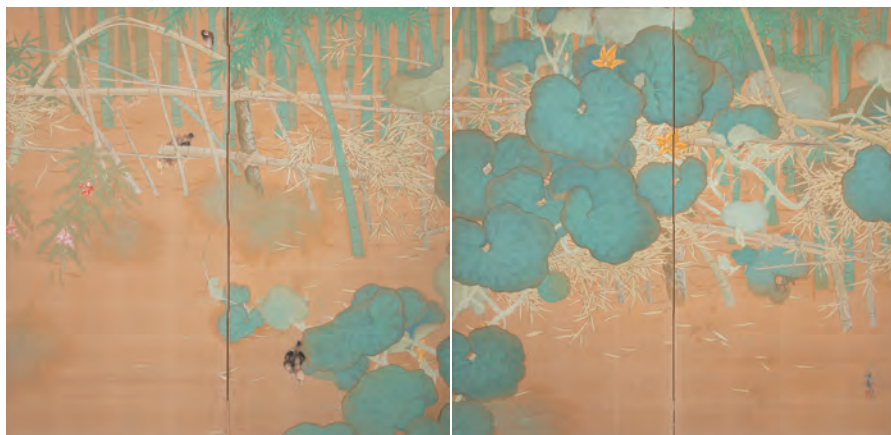


波多野一岳（1877～1957）
奥村石蘭、鷺見春岳、織田杏齋に師事した画家で、鹿を得意としたことから「鹿の一岳」と呼ばれました。本作に鹿は描かれていませんが、その分、風景描写の描き込みに重きが置かれています。

波多野一岳《新緑之図》
大正～昭和（1920-30c.）
絹本着彩・軸装
鯉庵コレクション

第二章 東海美術協会と次世代の日本画家たち

本章では、昭和3年（1928）の御大典奉祝名古屋博覧会と同時期に活躍した日本画家を中心に紹介します。東京や京都で学んだ若手画家や、東西出身で活動拠点を名古屋に移した画家など、中京地域の美術界を盛り上げた画家たちの作品をご覧ください。



石川竹邨《初夏竹垣遊禽図屏風》
大正（1923年以前）
絹本着彩・屏風装（二曲一双）
個人蔵



大岩聚星《春趣二題》
大正15年（1926）
絹本着彩・軸装（双幅）
鯉庵コレクション

第4回青甲社展出品

石川竹邨（1884～1952）

東京生まれで、松本楓湖、鈴木華邨に学んだ画家です。関東大震災で私財を失い名古屋に移住し、以降は生涯名古屋を拠点としました。本作は今回新発見となった大作で、竹垣を背景に青々としたカボチャの葉と弦が画面を覆い、雀、つがいの鶉（うずら）、ホウセンカが添えられています。

大岩聚星（1898～1969）

愛知県出身で、京都市立芸術大学に進学し、青甲社・愛土社で主に作品を発表しました。本作は大正15年（1926）の青甲社研究会で佳作となり、翌年の第4回青甲社展に出品された作品です。

石川英鳳（1896、1973）

京都市立絵画専門学校卒業後に帰郷、蓬萊画塾を創設し多くの門弟を育てました。大正13年（1924）の第5回帝展から連続8回入選を果しましたが、本作はその8作のうち、唯一現存が確認されている作品です。



第8回帝展入選

石川英鳳《紅花白鳥》
昭和2年（1927）
絹本着彩・屏風装（二曲一隻）
鯉庵コレクション

用語解説コーナー②

・愛土社

大正7年（1918）に、佐藤空鳴ら京都市立絵画専門学校の在学中で結成、大正10年から名古屋で展覧会を開催した。メンバーのほとんどが中京地域で活動しながら、京都の西山翠嶂の画塾・青甲社にも所属していたことが知られている。

・中京美術院

大正13年（1924）に朝見香城を中心に中京地域の日本画発展のために結成された団体。喜多村麦子、渡辺幾春、横山葩生など、非愛土社系の若手画家が参加した。

・愛知社

大正7年（1918）に、主に文展（帝展）を中心に活動していた中京圏出身者である川崎小虎、富田范溪、太田三郎、加藤静児によって結成された総合美術団体。定期的に名古屋で展覧会を開催した。



朝見香城《海苔採り》 大正 14 年ごろ（1925c.）
紙本着彩・屏風装（四曲一隻）
鯉庵コレクション（名古屋市美術館寄託）

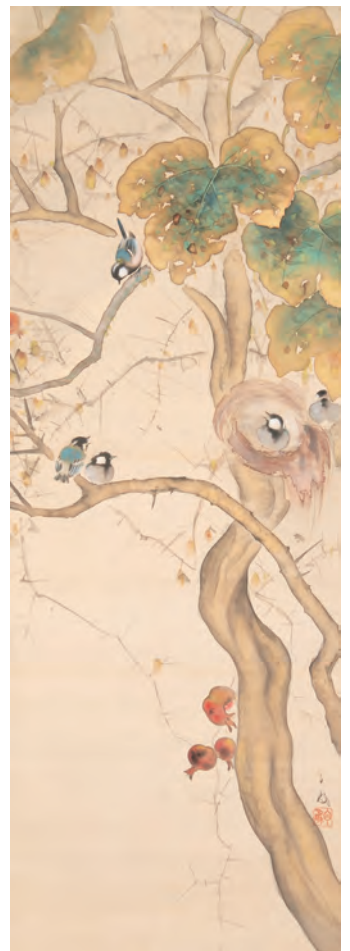
朝見香城（1890～1974）

姫路出身で、大正元年（1912）に来名し、生涯名古屋を拠点とした画家です。中京の美術団体の取りまとめや画塾の運営などを通して、中京画壇の発展に著しい貢献を果たしました。また、京都の西山翠嶂に学び、画塾・青甲社の結成にも名を連ねました。本作は、海苔の収穫が描かれており、香城没後すぐの追悼展にも出品されました。

用語解説コーナー③

・御大典奉祝名古屋博覧会

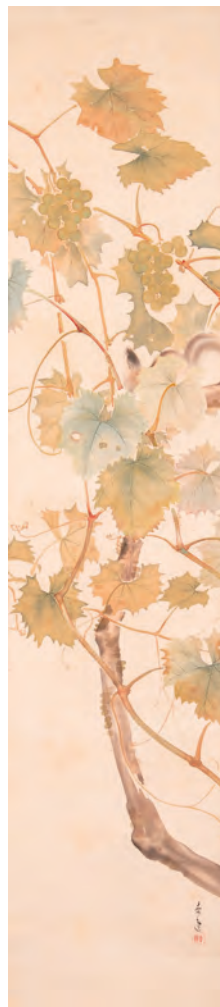
昭和3年（1928）に新天皇即位を祝して開催された博覧会。美術展の会場として新造された美術館は、博覧会閉会後に名古屋市に寄贈され、鶴舞公園美術館として戦前を通して多くの展覧会の会場となった。



近藤白鳳《葉蔭育雛》
大正～昭和（1924-27c.）
絹本着彩・軸装
鯉庵コレクション

近藤白鳳（1889～没年不明）

小寺雲洞に日本画を学んだ後、京都に出て西山翠嶂に師事した画家で、帰郷後中京美術院の結成に参加しました。瀟洒な花鳥画を得意とし、本作では柘榴（ざくろ）の木に小鳥が巣を作る様子が描かれます。



織田杏逸《葡萄之図》
昭和5年ごろ（1930c.）
絹本着彩・軸装
鯉庵コレクション

織田杏逸（1890～1970）

織田杏斎の三男で、京都市立絵画専門学校に進学、愛土社結成に参加、青甲社にも所属し、中京美術院にも名を連ねました。葡萄と栗鼠（りす）の組み合わせは多産を意味し、吉祥画として頻繁に描かれたものです。



浅井正臣《叭々鳥》
昭和10年ごろ（1935c.）
絹本墨画淡彩・軸装
鯉庵コレクション

浅井正臣（1896～1979）

昭和2年（1927）に京都市立絵画専門学校を卒業後、同4年に青甲社に入門しました。文展、帝展だけでなく院展にも出品が確認されており、本作は院展に出品していた時期の作品と推定されます。

常設企画展 近代名古屋の日本画界 出品リスト

第一章 名古屋開府三百年と中京画壇の成立

「出品リストの表記について」
名美…名古屋市美術館 鯉庵…鯉庵コレクション
鯉庵（寄託）…鯉庵コレクション（名古屋市美術館寄託）
個人…個人蔵
通…通期展示 前…前期展示 後…後期展示
◎…本リーフレットに掲載
○…中京画壇の日本画家たち―名古屋美術館のコレクションより」に掲載
●…両リーフレットに掲載なし

番号	作者	作品・資料名	所蔵	制作年和暦	制作年西暦	材質技法	期間
資料一		第十回関西府県連合共進会全図	個人	明治43年	1910	印刷物	通●
資料二		名古屋案内	個人	明治43年	1910	印刷物	通●
資料三		新古美術展覧会案内図	個人	明治43年	1910	印刷物	通●
資料四		絵葉書（愛知県商品陳列館、猿面茶席）	個人	明治43年	1910	印刷物	通●
一	織田杏齋	桐隠読書図	鯉庵	明治35年	1902	絹本墨画淡彩	通◎
二	石河有鄰	巖上孔雀図	名美	大正12年	1923	絹本着彩	通○
三	水谷芳年	花鳥図屏風	名美	大正	1920年代	絹本着彩	通○
四	渡辺秋溪（秋谿）	富岳憧憬之一白糸瀑布図	鯉庵	明治44年	1911	絹本墨画淡彩	通◎
資料五	渡辺秋溪（秋谿）著	富岳百景画譜	個人	明治41年	1908	印刷物	通●
五	藤島華僊	羅漢図	鯉庵	大正7年	1918	絹本着彩	通◎
六	大矢米年	吳道玄筆画龍上天図	鯉庵	大正13年	1924	絹本着彩	通◎
七	兼松蘆門	梅林之図	鯉庵	明治44年	1911	絹本墨画淡彩	通◎
資料六	兼松蘆門 著	日本画沿革史	個人	明治38年	1905	印刷物	通●
		竹田と華山	個人	明治39年	1906	印刷物	通●
		竹洞と梅逸	名美	明治44年	1911	印刷物	通●
八	小寺雲洞	雨中渡船図	鯉庵	大正昭和	1910年代	絹本着彩	通◎
九	奥村石亭	月次山水図屏風	名美	大正	1910年代	紙本墨画淡彩	通○
一〇	熊沢古蓬	勁翮排霜図（鷹野猛威）	名美	昭和2年	1927	絹本着彩	通○
一一	毛利梅友	玉野霜曉	個人	大正昭和	1920年代	絹本着彩	通●
一二	松田杏亭	双鯉図	名美	戦後	1950年代	絹本着彩	通○
一三	波多野一岳	新緑之図	鯉庵	大正昭和	1920年代	絹本着彩	前○
一三	狩野梅齋	梅花双鶏図	鯉庵	大正昭和	1920年代	絹本着彩	後○

第二章 東海美術協会と次世代の日本画家たち

番号	作者	作品・資料名	所蔵	制作年和暦	制作年西暦	材質技法	期間
資料一	田部井竹香 著 野崎華年 装丁	古今中京画談	個人	明治44年	1911	書籍	通◎
資料二	東海美術協会	東海秀美帖	名美	明治43年	1910	印刷物	通●
資料三	東海美術協会	第十九回東海美術協会展覧会目録	個人	昭和4年	1929	印刷物	通●
一一一	水野清亭	春麗	名美	大正3年	1914	絹本着彩	前○
一一二	石川竹邨	初夏竹垣遊禽図屏風	個人	大正	1923年以前	絹本着彩	後◎
二一一	佐藤空鳴	晩春（分譲地風景）	名美	昭和4年	1929	紙本着彩	前○
二一二	大岩聚星	春趣二題	鐔庵	大正15年	1926	紙本着彩	後◎
三	織田杏逸	葡萄之図	鐔庵	昭和5年ごろ	1930年ごろ	絹本着彩	通◎
四	近藤白鳳	葉蔭育雛	鐔庵	大正ゝ昭和	1924ゝ1927年ごろ	絹本着彩	通◎
五	浅井正臣	叭々鳥	鐔庵	昭和10年ごろ	1935ごろ	紙本墨画淡彩	通◎
六	石川英鳳	紅花白鳥	鐔庵（寄託）	昭和2年	1927	絹本着彩	通◎
七	朝見香城	海苔採り	鐔庵（寄託）	大正14年ごろ	1925年ごろ	紙本着彩	通◎
八	横山葩生	晴れたる日	名美	昭和11年	1936	絹本着彩	通○
九	渡辺幾春	蓄音機	名美	昭和8年	1933	絹本着彩	通○
一〇	喜多村麦子	暮れ行く堀川	名美	昭和3年	1928	絹本着彩	通○
資料四ゝ七		御大典奉祝名古屋博覧会関連資料 （鳥瞰図、絵葉書、美術展目録、 記念菓子皿）	個人	昭和3年	1928	印刷物・陶器	通●
		《暮れ行く堀川》陳列通知	名美	昭和3年	1928	印刷物	通●
		《暮れ行く堀川》絵葉書	名美	昭和3年	1928	印刷物	通●
		麦畑	名美	昭和8年ごろ	1933年ごろ	絹本着彩	通○
一一	富田范溪	山は粧ふ	名美	昭和12年	1937	紙本着彩	前○
一二一	平岩三陽	椿咲く島	名美	大正9年	1920	絹本着彩	後○
一二二	清水有聲	玄上	名美	昭和4年	1929	絹本着彩	前○
一三一	林雲鳳	業平観梅	名美	昭和5年ごろ	1930ごろ	紙本着彩	後○
一三二	服部有恒	竜宮城図屏風	名美	昭和2年ごろ	1927ごろ	絹本着彩	前○
一四一	山田秋衛	題不詳（合戦図）	名美	昭和前半	1920ゝ30年代	紙本着彩	後○
一四二	森村稻門（宜永）		名美				

謝辞
本展の開催にあたり、貴重な作品を快くご出品いただきました、鐔庵コレクションをはじめとした所蔵者の皆様、ならびに展覧会実現のためにご協力を賜った関係者各位に心から感謝申し上げます
※狩野梅斎については、著作権者が見つからず、図版の掲載についてご連絡することができませんでした。
著作権者をご存知の方は、名古屋市美術館までご連絡ください。